

オバマ氏訪問 世界注目 学びの機会拡大を期待

人々、人々。8月6日の「原爆の日」を迎えた広島平和記念資料館は、入り口付近から大勢の来館者が列をなしていた。原爆の恐ろしさを伝える約400点の資料が並ぶ展示室を順路に沿って抜けると、本館北側ギャラリーにひとときわ人だかりが目立つブースがあった。

「平和を広め核兵器のない世界を追求する勇気を持ちましょう」。ガラスケースには、

8・6を つなぐ 広島原爆の日

本紙記者報告①

オバマ米大統領が館内でつづった直筆メッセージと、広島市に寄贈した自作の折り鶴4羽。外国人を含む多くの来館者が一心にのぞき込み、カメラを向ける。資料館によると、被爆資料以外を展示する特設ブースを設けるのは初めてだという。

5月の現職米大統領による初の被爆地「ヒロシマ」訪問は、世界的に関心を呼び起こす契機となり、資料館入館者数は、前年との比較で5月は9・5%増だったのに対し、6月は41・8%増となる14万8432人が詰め掛けた。訪日ブームを背景に2013年から3年連続で過去最高を記録している外国人も3万151人と1・5倍超に上った。スイスから家族で訪れたダニエル・ジャーマンさん(53)

は「(オバマ氏の)訪問の意義はある。(『核兵器なき社会』を提唱したプラハ演説後も)何も変わっていないのが現状だ。間違いを繰り返さないように人間は学ばなければならぬ」と話す。資料館は「外国人はきこ雲の下で何が起ったか知らない人が多い。より多くの人が被爆の実相に触れて、核兵器の非人道性について理解することが世界平和につながる」と期待する。

「広島に来てくださったことを、新たなスタートにした」と。被爆体験の証言を続ける岡田恵美子さん(79)「広島市は『世界の人から注目されて、広島・長崎について学んでもらう機会となった』と訪問を評価する。資料館を案内するピースボランティアを10

年以上務める末岡昇さん(78)「同」は「(訪問による)心境の変化はないが、この広島に空気に触れてくれたことは大きな一歩だと力を込めた。

世界の目がヒロシマに注がれる一方、被爆者健康手帳所持者の15年度末の平均年齢は80・86歳に達し、被爆者の高齢化に伴う記憶の「風化」は依然として大きな課題となっている。戦争体験者の減少に伴い、青少年層の平和意識が低下していると指摘する声も上がる。核兵器の恐ろしさ、平和の尊さをどのように次世代に継承していくべきか、市民らが「86(ハチロク)」と表現する71回目の原爆の日を迎えた広島での取り組みを報告する。

(伊藤愛)



オバマ氏の折り鶴にカメラを向ける来館者ら—8月上旬、広島市中区の広島平和記念資料館